

# 現代中国語における「使……把……」 構文の意味と論理構造

Meaning and Logic of Special Causative Constructions  
in Mandarin Chinese Semantics

温 琳  
WEN Lin

## キーワード

使役 述語論理 論理式 意味解釈 現代中国語

## 0. 内容提要

众所周知，汉语用“使”字句表示使动或者说使役。研究“使”字句的论文、专著已经有很多，这些研究有的着重考察“使”字句的动词受限，有的放眼于“使”字句的内部结构之间的关系，但是就“使”字句表示使动一说几乎没有什么争议，可以说“使”字句表示使动在现代汉语学界已经达成了共识。那么一些比较特殊的“使”字句，比如说“使……被……”句，“使……把……”句以及“使……得……”句又该如何理解呢？本文将把重点放在“使……把……”句上，从形式语义学的观点出发，通过为“使……把……”构建逻辑式来考察这类句型的逻辑结构，从而阐明该句型所表达的自然语义，以帮助日本学生正确理解和准确使用。

## 目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 「使……把……」構文の論理構造
4. 実例による検証
5. 結びにかえて

## 1. はじめに

現代中国語における使役を表す構文、つまり「使構文」<sup>1)</sup>については、古くから関心が寄せられ、様々な角度から研究がなされてきた。しかし、「使……把……」構文のような特殊な「使構文」<sup>2)</sup>についての研究はほとんど見られない。実際、「使……把……」構文は中国語の難点の一つであり、中国語教育を行う上では避けて通れない問題である。日本語にも使役という言語現象や使役を表す構文があるため、単純な「使構文」の習得は日本人学生にとってさほど難しいことではないが、「使……把……」構文のようなやや複雑な構文になると習得が困難になる傾向が見られる。

本稿では形式意味論の立場から、現代中国語における「使……把……」構文を論理式で記述することによって、その論理構造を明らかにし、それに意味解釈を与える。この手法を用いることによって、中国語学習者が、本稿で構築された「使……把……」構文の論理構造を手がかりに、より正確に「使……把……」構文を理解でき、使用できるようになることが期待される。

## 2. 先行研究

「使……把……」構文に関する先行研究はあまり見られない。そのため本章では「使構文」についての先行研究を見てみたい。

### 2.1 範曉 (2000) による「使構文」に関する研究

範 (2000) は「使役」について「文法構造として使役構造は一種の客観的事実を表す。ある実体がある状態 (動作行為、活動変化及び性質状態等を含む) になるのが自発的でなく、ある使役の主体の働きかけ、或いは影響を受けてそうなる場合である」(範 2000 : 135, 筆者訳)<sup>3)</sup>と記述している。範 (2000) は“使”の表す使役の意味をはっきりさせたと言える。

### 2.2 孟燕 (2002) による「使構文」に関する研究

孟 (2002) は“A + 使 + B + C”のような「使構文」について議論し

た。孟（2002）は A を使役者、B を遂行者、C を結果（部分）と呼び、結果（部分）に用いられる動詞を分類することによって、“A + 使 + B + C” のような「使構文」を 6 種類に分類している。具体的には①裸動詞「使構文」②動詞 + 動態助詞「使構文」③動詞 + 補語「使構文」④動詞 + 動目構造「使構文」⑤前置詞 + 動詞「使構文」⑥連動構造「使構文」（孟 2002 : 133, 筆者訳）<sup>4)</sup>と述べている。孟（2002）は“A + 使 + B + C” のような「使構文」を 6 種類に細分化することによって、“A + 使 + B + C” のような「使構文」をよりミクロに理解することに一役を買ったと言える。

### 2.3 三宅登之（2004）による「使構文」に関する研究

三宅（2004）は「使役とはそもそも、二つの出来事の因果連鎖（causal chain）を表す。すなわち、原因となる出来事が起こり、結果となる出来事を引き起こすという事態である。このような使役的事態の統語構造が「S + V1 + “使” + Y + V2」であり、これが“使”使役構文の本来の姿である。簡潔に言えば、使役動詞“使”は、「“S”が“V1”した（なった）」、その結果「“Y”が“V2”した（なった）」という二つの出来事を因果連鎖上結びつける、いわば接続詞的な役割を果たしている」（三宅 2004 : 20）と記述している。

### 2.4 魏会平（2008）による「使構文」に関する研究

魏（2008）は認知理論を用いて、“A + 使 + B + C” のような「使構文」について分析している。“A + 使 + B + C” のような「使構文」は、構文構造が使役に、文中要素の序列が使役の要素に、そして、文中の原因を表す要素、結果を表す要素の順序が主観世界の順序に対応している。前述の使役は認知理論における主観世界の中の使役を指す。そのため、魏（2008）は“A + 使 + B + C” のような「使構文」の顕在的な構文構造が「使役」という潜在的意味構造の直接的な反映だと結論づけている。また、魏（2008）は“A + 使 + B + C” のような「使構文」の意味特徴は、「否動態性」、「否自主性」、「已然性」（魏 2008 : 42, 筆者訳）<sup>5)</sup>であると述

べている。魏（2008）は認知理論を用いて「使構文」を分析することによって、新しい理論を中国語の意味解釈に適用できることを示した。

## 2.5 呉平（2009）による「使構文」に関する研究

呉（2009）は「Neo-Davidsonian」アプローチを用いて、「使構文」について考察した。呉（2009）によると、「使構文」は結果構文の下位分類であり、その論理構造は  $\lambda P[\lambda e[\exists e1[\exists e2[e=s(e1Ue2)\wedge使(e1)\wedge Causer(e1)\wedge Th(e1)=y\wedge P(e2)\wedge Arg(e2)=y\wedge Cul(e1)\subseteq e2]]]]$  で表すことができる。また、「使得構文」は「使構文」の変形であり、二つの構文が同様な意味を表す」（呉 2009：161，筆者訳）<sup>6)</sup>と述べている。

## 3. 「使……把……」構文の論理構造

次に、「使……把……」構文の論理構造を見てみたい。“使……把……”構文とは、「使構文」において文の一部として「把構文」が埋め込まれている「使構文」のことを指す。具体的な用例を分析しながら考えてみよう。

- 1 但是在马樱花那里，总有这样那样的东西，包括她幼稚而又洋溢着智慧的幻想，使我把中断了的记忆联系起来，知道自己是个人，是个正常的人。（宛新政 2005：144 引用例）

（しかし馬桜花のところにはいつもさまざまなものがある。それらは、彼女の幼くも知恵に満ちた幻想も含んでいる。それが私に途切れた記憶をつなげ、自分は人間である、それも正常な人間であると思わせてくれた。）（筆者訳）

用例1の「使役」の分析に直接かかわる部分は次の文1-1である。

- 1-1 东西使我把记忆联系起来。（物が私に記憶をつなげさせた。）

文1-1を細分化すると、次のようになる。

1-2 东西使我

1-3 我把记忆联系起来

まず1-2の論理式を記述する。1-2は「物が私にさせる」という一つの命題内容を含んでいるため、その論理式は次の1-2' になる。“使”関数の第三項が空だが、それは“使”が三つの項を持つ関数だからである。

1-2' 使' {东西, 我,                    }  
          サセル' ~ガ ~ニ        ~コトヲ

次に、1-3の論理式を記述する。1-3を観察すると、1-3は「把」構文であり、「私が記憶にもたらす」と「私が記憶を繋げる」と「私は、記憶に、私が記憶を繋げることを、もたらす」という三つの命題内容を含んでいることが分かる。そのため、論理式は次の1-3' のように記述できる。

1-3' 把' {我, 记忆, 联系' (我, 记忆)}  
          モタラス' ~ガ ~ニ                    ~コトヲ

ここでは“把' {我, 记忆}”が「私が記憶にもたらす」の意を、“联系' (我, 记忆)”が「私は記憶を繋げる」の意を、“把'”関数の値である“把' {我, 记忆, 联系' (我, 记忆)}”が「私が、記憶に、私が記憶を繋げることを、もたらす」という意味を表している。

最後に、1-3の論理式1-3' を1-2の論理式1-2' の第三項に代入すれば、文1-1の論理式を得ることができる。論理式1-1' は次の通りである。

1-1' 使' [东西, 我, 把' {我, 记忆, 联系' (我, 记忆)}]  
 モタラス' ~ガ ~ニ ~コトヲ  
 サセル' ~ガ ~ニ ~コトヲ

ここでは“使' [东西, 我] が「物が私にさせる」の意を, “把' {我, 记忆, 联系' (我, 记忆)}” が「私が, 記憶に, 私が記憶を繋げることを, もたらす」の意を, “使' [东西, 我, 把' {我, 记忆, 联系' (我, 记忆)}]” が「物が, 私に, 私が記憶に私が記憶を繋げることをもたらすことを, させる」という意味を表している。

「物が, 私に, 私が記憶に私が記憶を繋げることをもたらすことを, させる」という表現をより自然な日本語で記述すると, 「物が私に, 私が記憶を繋げることをもたらすようにさせる」という文になる。これが文 1-1 の表す意味である。

用例をもう一つ見てみたい。

2 可是, 她一天到晚无事可作, 闲得起急, 急躁使她甚至要把理想抛开, 而先去解决那点比较低卑的要求与欲望, 她请求杨老太太给她聘一位教师, 补习功课, 好准备考大学。(老舍《文博士》)

(しかし, 彼女は一日中やることがないことに苛立った。その苛立ちは, 彼女に理想さえも捨てさせ, まずあの割と低俗な要求と欲求を満たしに行かせた。彼女は楊お婆さんに頼んで先生を一人招き, 授業の復習をし, しっかり大学受験に備えた。) (筆者訳)

用例 2 の「使役」の分析に直接かかわる部分は次の文 2-1 である。

2-1 急躁使她把理想抛开。(苛立ちが彼女に理想を捨てさせる。)

文 2-1 を細分化すると, 次のようになる。

2-2 急躁使她

### 2-3 她把理想抛开

まず、2-2 の論理式を記述する。2-2 は「苛立ちが彼女にさせる」という一つの命題内容を含んでいるため、その論理式は次の 2-2' のようになる。“使”関数の第三項が空なのは、既述したように“使”が三つの項を持つ関数だからである。

$$\begin{array}{l} 2-2' \text{ 使}' \{ \text{急躁}, \text{她}, \quad \quad \quad \} \\ \quad \quad \quad \text{サセル}' \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \sim \text{コトヲ} \end{array}$$

次に 2-3 の論理式を記述する。2-3 は「把」構文である。文 2-3 は「彼女が理想にもたらず」と「彼女が理想を捨てる」と「彼女は、理想に、彼女が理想を捨てることを、もたらず」という三つの命題内容を含んでいるため、論理式は次の 2-3' のように記述できる。

$$\begin{array}{l} 2-3' \text{ 把}' \{ \text{她}, \text{理想}, \text{抛开}' (\text{她}, \text{理想}) \} \\ \quad \quad \quad \text{モタラス}' \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \quad \quad \sim \text{コトヲ} \end{array}$$

ここでは“把’{她, 理想}”が「彼女が理想にもたらず」の意を, “抛开’(她, 理想)”が「彼女が理想を捨てる」の意を, “把’”関数の値である“把’{她, 理想, 抛开’(她, 理想)}”が「彼女は、理想に、彼女が理想を捨てることを、もたらず」という意味を表している。

最後に、2-3 の論理式 2-3' を 2-2 の論理式 2-2' の第三項に代入すれば、文 2-1 の論理式を得ることができる。論理式 2-1' は次の通りである。

$$\begin{array}{l} 2-1' \text{ 使}' [\text{急躁}, \text{她}, \text{把}' \{ \text{她}, \text{理想}, \text{抛开}' (\text{她}, \text{理想}) \} \\ \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \text{モタラス}' \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \quad \quad \sim \text{コトヲ} \\ \text{サセル}' \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \sim \text{コトヲ} \end{array}$$

ここでは“使’ [急躁, 她]”が「苛立ちが彼女にさせる」の意を, “把’ {她, 理想, 抛开} (她, 理想)}”が「彼女は, 理想に, 彼女が理想を捨てることを, もたらす」の意を, そして“使’ [急躁, 她, 把’ {她, 理想, 抛开} (她, 理想)}]”が「苛立ちが, 彼女に, 彼女が理想に彼女が理想を捨てることをもたらすことを, させる」の意を表している。

「苛立ちが, 彼女に, 彼女が理想に彼女が理想を捨てることをもたらすことを, させる」という表現をより自然な日本語で記述すると, 「苛立ちが彼女に, 彼女が理想を捨てることをもたらすようにさせる」という文になる。これが文 2-1 の表す意味である。

ここまで, 用例 1, 用例 2 を用いて, 「使……把……」構文の論理構造を導き出した。ここで, 「使……把……」構文の論理構造を構築する。

まず, 自然言語の文章及び導き出された論理構造を下に並べて観察してみたい。

1-1 東西使我把记忆联系起来。(物が私に記憶を繋げさせた。)

1-1 の論理構造は 1-1’ である。

1-1’ 使’ [东西, 我, 把’ {我, 记忆, 联系} (我, 记忆)}  
モタラス’ ~ガ ~ニ ~コトラ  
サセル’ ~ガ ~ニ ~コトラ

論理構造 1-1’ において, “东西”は「使構文」の主語(使役者)であり, “我”は「使構文」の目的語(被使役者)であると同時に, 「把構文」の主語(処置者)である。“记忆”は「把構文」の目的語(処置対象)であり, “联系”は「使……把……」構文の動詞である。

文 2-1 及びその論理構造 2-1’ を見てみよう。

2-1 急躁使她把理想抛开。(苛立ちが彼女に理想を捨てさせる。)



2-1' 使' [急躁, 她, 把' {她, 理想, 抛开' (她, 理想)}]  
                                 モタラス'   ～ガ   ～ニ                     ～コトラ  
 サセル'   ～ガ   ～ニ   ～コトラ

論理構造 2-1' において, “急躁” は「使構文」の主語 (使役者) であり, “她” は「使構文」の目的語 (被使役者) であると同時に, 「把構文」の主語 (処置者) である。“理想” は「把構文」の目的語 (処置対象) であり, “抛开” は「使……把……」構文の動詞である。

論理構造 1-1', 2-1' に基づくと “使……把……” 構文の論理式には, 使役者, 被使役者 / 処置者, 処置対象という 3 つの変項が存在することが分かる。そのため, “使……把……” 構文の論理式は, 次のように構築できると考えられる。

「使……把……」構文の論理式: 使' [x, y, 把' {y, z, V' (y, z)}]  
 制約: x は「使構文」の主語 (使役者) = “使” の左に位置する名詞  
       y は「使構文」の目的語 / 「把構文」の主語 (被使役者 / 処置者)  
       = “使” の右に位置する人称代名詞  
       z は「把構文」の目的語 (処置対象) = “把” の右に位置する名詞  
       V は「使……把……」構文の動詞または動詞構造 = 文末に位置する動詞または動詞構造

#### 4. 実例による検証

ここでは, 3 で構築した「使……把……」構文の論理式の妥当性を, 実例を用いて検証する。具体的には, 3 で構築した「使……把……」構文の論理式を用いて, 自然言語の実例に意味解釈を与える。得られた意味解釈が自然言語の文の意味と一致すれば, 構築した「使……把……」構文の論理式が妥当であると立証できる。逆に, 得られた意味解釈が自然言語の文の意味と一致しなければ, 構築した「使……把……」構文の論理式が妥当ではないということを立証することになる。

まず, 用例 3 について考えてみたい。

3 在壕沟尽头，离小洞子不远的地方，小谭遇见了闻季爽。这使他把刚才的不快全忘掉，真诚地愿意听听好朋友有什么新的成就。（老舍《无名高地有了名》）

（堀のはずれ—小さな洞窟からそう遠くないところで、小譚は聞季爽に出会った。このことは彼に先ほどの不愉快な気持ちを全て忘れさせ、親友が新たに何を達成したのかを誠意を持って聞きたいという気持ちにさせた。）（筆者訳）

用例3の「使役」の分析に直接かかわる部分は次の文3-1である。

3-1 这使他把不快忘掉。（これが彼に不快を忘れさせる。）

「使……把……」構文の論理式である使' [x, y, 把' {y, z, V' (y, z)}] を用いて、文3-1に意味解釈を与えてみよう。まず、x, y, z, V を特定する。文3-1から次のように判断できる。

x = 这  
y = 他  
z = 不快  
V = 忘掉

これらの要素を「使……把……」構文の論理式に代入すると、文3-1の論理式3-1' が得られる。

3-1' 使' [这, 他, 把' {他, 不快, 忘掉' (他, 不快)}]

ここでは、“忘掉' (他, 不快)”が「彼が不快を忘れる」の意を，“把' {他, 不快, 忘掉' (他, 不快)}”が「彼が不快にもたらず」の意を，“把' {他, 不快, 忘掉' (他, 不快)}”が「彼が、不快に、彼が不快を忘れることをもたらず」の意を，“使' [这, 他, ”が「これが彼にさせる」の意を，“使' [这, 他,

把' {他, 不快, 忘掉' (他, 不快)}]" が「これが, 彼に, 彼が不快に彼が不快を忘れることをもたらすことを, させる」の意を表している。

「これが, 彼に, 彼が不快に彼が不快を忘れることをもたらすことを, させる」という表現をより自然な日本語で記述すると, 「これが彼に, 彼が不快を忘れることをもたらすようにさせる」という文になり, 文 3-1 の表す意味と一致する。

もう一つ用例を見よう。用例 4 である。

4 这点难过, 这点迷乱, 使他把过去的苦处都想了起来。(老舍《文博士》)

(この辛さと迷いは, 以前味わったあらゆる苦しみを彼に思い出させた。)(筆者訳)

用例 4 の「使役」の分析に直接かかわる部分は次の文 4-1 である。

4-1 难过和迷乱, 使他把苦处想起来。(辛さと迷いは, 苦しみを彼に思い出させる。)

「使……把……」構文の論理式である使' [x, y, 把' {y, z, V' (y, z)}] を用いて, 文章 4-1 に意味解釈を与えてみよう。まず, x, y, z, V を特定する。文 4-1 から次のように判断できる。

x = 难过和迷乱  
y = 他  
z = 苦处  
V = 想起来

これらの要素を「使……把……」構文の論理式に代入すると, 文章 4-1 の論理式が次の 4-1' になる。

4-1' 使' [难过和迷乱, 他, 把' {他, 苦处, 想' (他, 苦处) & 有' (想, 起来)}]

ここでは, “想' (他, 苦处) & 有' (想, 起来)” が「彼が苦しみを思い出す」の意を, “把' {他, 苦处, 想' (他, 苦处) & 有' (想, 起来)}” が「彼が, 苦しみに, 彼が苦しみを思い出すことをもたらす」の意を, “使' [难过和迷乱, 他, 把' {他, 苦处, 想' (他, 苦处) & 有' (想, 起来)}]” が「辛さと迷いが, 彼に, 彼が苦しみに彼が苦しみを思い出すことをもたらすことを, させる」の意を表している。

「辛さと迷いが, 彼に, 彼が苦しみに彼が苦しみを思い出すことをもたらすことを, させる」という表現をより自然な日本語で記述すると, 「辛さと迷いが彼に, 彼が苦しみを思い出すことをもたらすようにさせる」という文になり, 文4-1の表す意味と一致する。

文3-1, 4-1を検証した結果, 論理式により得られた意味が文の表す意味と一致した。したがって, 筆者が本稿で構築した「使……把……」構文の論理式は妥当であることが証明されたと言える。

## 5. 結びにかえて

以上, 形式意味論の枠組みに従い, 「使……把……」構文の論理構造を明らかにし, 意味を解釈してきた。考察のプロセスが示しているのは, 筆者の提案, つまり「使……把……」構文を  $x$ ,  $y$ ,  $z$  の三個の項を持つ関数と見なし, その論理式を次のように記述することは間違いではないということである。

「使……把……」構文の論理式:

※使' [ $x$ ,  $y$ , 把' { $y$ ,  $z$ , V' ( $y$ ,  $z$ )}]

制約:  $x$  は使役者

$y$  は被使役者/処置者

$z$  は処置対象

## Vは「使……把……」構文の動詞または動詞構造

しかし、本稿で取り扱われた用例は、すべてxが名詞または指示代名詞の場合である。“来到院中，他故意的夸奖那些石榴，好使祁老人把眼泪收回去。（老舍《四世同堂》）”のように，xが単純な名詞または指示代詞ではなく，動詞構造または一つのSVO構造の単文の場合，果たして上の論理式は依然として成立するのだろうか。上の論理式の前に「※」がついているのがそのためである。したがって，「使……把……」構文の論理式には次のような制限を加えなければならない。

「使……把……」構文の論理式：

使' [x, y, 把' {y, z, V' (y, z)}] (xが名詞または指示代名詞の場合に限る)

制約：xは使役者

yは被使役者／処置者

zは処置対象

Vは「使……把……」構文の動詞または動詞構造

また，“来到院中，他故意的夸奖那些石榴，好使祁老人把眼泪收回去。（老舍《四世同堂》）”のような言語事実がある以上，無視することはできない。稿を改めて，検証していきたい。

## 注

- 1) 「使構文」の定義については温（2008）を参照のこと。
- 2) 「使構文」の分類方法については温（2008）を参照のこと。
- 3) 原文は次の通りである。“作为语法结构的致使结构反映了一种客观事实—某实体发生某种情状（包括动作行为，活动变化，性质状态等）不是自发的，而是受某种致使主体的作用或影响而引发的。”
- 4) 原文は次の通りである。“‘使’字句包括致使体，使体，结果体三部分，根据进入这一部分（结果体）的动词的特征，将现在汉语使字句句式，概括起来主

- 要有六种。(1) 光杆动词式使字句, (2) 动体式使字句, (3) 动补式使字句, (4) 动宾式使字句, (5) 状动式使字句, (6) 连动式使字句。”
- 5) 原文は次の通りである。“‘使’字句の句法成分対应于致使情景の構成要素, ‘使’字句の句法成分の序列対应于致使情景要素の序列, 原因事件和結果事件の先后順序対应于人們經驗結構中の先后順序。因此, 我們可以说, ‘使’字句表层句法結構是致使义深层语义結構的‘直接映射。’”“‘使’字句具有[-动态性], [-自主性]和[+已然性]的特征。”
- 6) 原文は次の通りである。“‘我們可以認為致使句式是結果結果句的一個非常重要的次類。如果忽略 Causer (e1) 的取值的話, 那麼‘使’字句基本格式的事件結構就可以是  $\lambda P[\lambda e[\exists e1[\exists e2[e=s(e1Ue2) \wedge \text{使}(e1) \wedge \text{Causer}(e1) \wedge \text{Th}(e1)=y \wedge P(e2) \wedge \text{Arg}(e2)=y \wedge \text{Cul}(e1) \subseteq e2]]]]]$ ”。“我們可以認為‘使得’句是‘使’字句句法上的變體形式。在語義上, 這兩種句式的事件結構是相同的。”

#### 参考文献

- 方立, 2000, 『邏輯語義学』, 北京語言文化大學出版社
- 範曉, 2000, 「論致使結構」, 『語法研究和探索 (十)』, 商務印書館
- 郡司隆男, 1987, 『自然言語の文法理論』, 産業図書
- 何英玉, 2005, 『語義学』, 上海外語教育出版社
- 賈彥德, 2005, 『漢語語義学』, 北京大學出版社
- 蔣巖·潘海華, 1998, 『形式語義学引論』, 中國社會科學出版社
- 李臨定, 1986, 『現代漢語句型』, 商務印書館
- 李臨定, 1988, 『漢語比較變換語法』, 中國社會科學出版社
- 劉月華等, 1983, 『實用現代漢語語法』, 外語教學與研究出版社
- 呂叔湘, 1980, 『現代漢語八百詞』, 商務印書館
- 呂叔湘, 1942, 『中國文法要略』, 商務印書館
- 馬清華, 2006, 『語義的多維研究』, 語文出版社
- 丸田忠雄, 1998, 『使役動詞のアナトミー 語彙的使役動詞の語彙概念構造』, 松柏社
- L·ワイトゲンシュタイン, 2005, 『論理哲學論考』(野矢茂樹訳), 岩波書店

- 松村文芳, 2005, 「「把構文」と「被構文」に用いられる「給」の意味と論理」, 『語学教育研究論叢第 22 号』, 大東文化大学語学教育研究所
- 孟燕, 2002, 「“使”字句句式浅析」, 『語海新探』, 山東教育出版社
- 木村英樹, 2000, 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」, 『中国語学』, No.247, pp.19-39
- 繆錦安, 1990, 『漢語的語義結構和補語形式』, 上海外語教育出版社
- 野矢茂樹, 2006, 『ウィトゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』, 筑摩書房
- アイバン・A・サグ, トーマス・ワソー, 2001, 『統語論入門：形式的アプローチ』(郡司隆男, 原田康也訳), 岩波書店
- 三宅登之, 2004, 「使役動詞“使”がとる主語の認知的解釈」, 『言語情報学研究報告』NO.3, 東京外国語大学大学院 地域文化研究科
- 沈家煊, 1995, 「“有界”与“無界”」, 『中国語文』, 第五期
- 沈家煊, 2000, 「句式与配価」, 『中国語文』, 第四期
- 白井賢一郎, 1985, 『形式意味論入門一言語・論理・認知の世界一』, 産業図書
- 宛新政, 2005, 『現代漢語致使句研究』, 浙江大学出版社
- 魏会平, 2008, 「現代漢語“使”字句的語義分析」, 『現代語文』, 現代語文出版社
- 温琳, 2008, 「現代中国語における使役構文の意味と論理構造 —その一「使構文」一」, 『人文研究』, 神奈川大学人文学会
- 温琳, 2009, 「現代中国語における受身構文の意味と論理構造 —「被構文」一」, 『中国語研究論集(神奈川大学中国語学科創設 20 周年記念)』, 神奈川大学中国語学科
- 呉平, 2009, 「“使”字句事件結構的語義分析」, 『浙江大学学報』, 浙江大学出版社
- 熊仲儒, 2004, 『現代漢語中的致使句式』, 安徽大学出版社
- 楊凱榮, 1989, 『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』, くろしお出版
- 周紅, 2005, 『現代漢語致使範疇研究』, 復旦大学出版社
- 朱德熙, 1980, 『現代漢語語法研究』, 商務印書館
- 朱德熙, 1982, 『語法講義』, 商務印書館